

## 緑川賢策（1864～1958）



第二代社長

緑川賢策

（昭和5年～昭和23年）

北秋木材株式会社の創業者。福島県東白川郡石井村の人で、元治元年9月13日の生まれ。

明治25年第二回衆議院総選挙の際、東北地方の自由民権運動の先駆となった民党の河野広中を支持し、その選挙応援会合中に、石井村駐在巡査の同行要請を断ったところサーベルで眉間を切り付けられた。傷は浅かったが同僚の白坂末吉は腹部を刺され死亡した。政府与党の猛烈な選挙干渉は全選挙区に伝わり民党は大勝の結果を博した。

東京に出て浅野財閥浅野総一郎の知遇を得た賢策は、明治30年、命を受け、浅野総一郎が計画した熊澤硫黄鉱山の鉱石搬送ルート確保の為赴任し、扇田町に居を構えた。

明治40年、休鉱後の大谷一扇田間の鉱石運搬軌道の利活用のため、中野・長部両事業区から国有林の年期特売を受け、秋田木材（能代市、井坂直幹社長）と共同で浅野製材所を創立、所長として経営に当たった。

明治45年、浅野製材株式会社に改組。大正8年、大館の平泉製材を合併し、新たに北秋木材を設立する。のちに扇田の工場は火災で全焼。これを機にさらに大館木材を合併し専務取締役就任。

大正11年、大館町停車場北の松木境に新工場を建設する。昭和5年、浅野総一郎氏の死去に伴い昭和13年までは代表取締役専務、昭和13年から昭和23年まで社長として北鹿地方最大の企業として地域商工界に君臨したばかりか、弘前木材、東北合板（青森）、信越木材、鶴見木工、満州木材加工などの経営にあたった。戦中は、秋田県製版同業組合副組合長にも就いた。

妻岸との間に三男一女を儲けたが、長女光子は熊田克郎（物価庁次長・武蔵野銀行頭取）に嫁した。二男林造は東京帝大工学部から満鉄中央研究所へ。北海道大学工学部長、北海道工業大学学長。賢策は昭和33年4月11日死去。賢彰院殿紫徳敬山大居士、扇田・寿仙寺に眠る。

（大館市の先人を顕彰する会 大館の人・事典）

## 緑川正雄（1907～1985）



第三代社長  
緑川正雄  
（昭和23年～昭和45年）

緑川賢策の長男。初代大館商工会議所会頭で、9期18年間在任した。

扇田町白砂生まれ。扇田小、大館中から法政大学経済学部学ぶ。昭和6年秋田木材入社。

昭和15年、北秋木材常務、23年社長に就任。

秋田県製材協会会長、県北洋材荷受協会会長、県木材工業振興対策協議会会長、協同組合秋田木材コンビナート理事長など商工業界全般で各種の公職を歴任。特に木材の需要安定功労者として昭和45年には藍綬褒章を受けている。

31年、大館ロータリークラブ、42年には大館市観光協会を設立して、それぞれ初代の会長に就いた。昭和60年1月13日死去。

（大館市の先人を顕彰する会 大館の人・事典）

## 緑川大二郎（1913～2000）



第四代社長  
緑川大二郎  
(昭和45年～平成2年)

緑川賢策の三男として大正2年4月1日に生まれる。

扇田小を終えると東京に嫁いだ姉の勧めを入れ、フランス語教育で知られた東京・暁星中学に進む。

旧制静岡高校から東京帝大法学部政治学科を卒業。三菱鉱業に入社するが、ほどなく応召に遭い南方戦線を転戦。終戦時は陸軍憲兵大尉。

昭和21年復員帰国。22年、父の経営する北秋木材に入り、45年に会長に退いた兄正雄の後を継ぎ社長就任。

ちなみに暁星中学の同期には、吉田茂元首相の長男で文芸評論家の吉田健一、歌舞伎俳優尾上松緑、科学評論家桶谷繁雄、一期下には元文部大臣田中竜夫らが居て、こうした人脈によって事業や団体活動が支えられた側面は見逃せないだろう。

石油ショックによる木材不況最中の47年、秋田県製材協会（24団体・229工場）の会長に。不況脱出には何より自助努力が肝心と、樽丸・合板・製函・木工とそれぞれだった業界各団体を説得し、49年に秋田県木材産業協同組合連合会の設立を果たし理事長に就任する。

48年に全国木材組合連合会副会長、59年会長となる。東大政治学科卒のキャリアにして政治経験はゼロだったが、事業一筋の末に就いたのは、《木材界の総理》の座であった。

50年からは三代目の大館商工会議所会頭。全国中小企業団体総連合副会長、木材需要拡大中央協議会会長、林政審議会・建築審議会委員など全国レベルの役職をはじめ大館観光開発社長、秋田相互銀行取締役など実業界での肩書は多い。

野球でのキャリアはつとに知られる。二人の兄も中学までは野球部だったが、末弟は小学校5年生で上級生を押しつけ主将となり、中学、高校、大学のいずれでも本塁の守りを託されながら主将の重責を担った。

暁星中学では東京地区予選決勝まで進んだが、7年連続出場の早稲田実業に甲子園出場を阻まれている。東大では昭和10年春からレギュラーに。

そして12年度に主将。東大は六大学リーグ加入から歴史も浅く、絶不振の

振の時代だったが、後の都市対抗優勝投手土井壽蔵投手を擁した慶応相手の在学中の2勝が光る。

東大時代は多くの名選手と対戦している。早稲田には若原正蔵投手とスラッガー高須清が、明治には甲子園決勝で明石中学を相手に延長25回を投げ抜いた中京商業の吉田昌男・野口のバッテリーはじめ杉浦清・岩本義行がいた。法政は鶴岡一人・戸倉勝城が活躍、立教では景浦将・坪内道則が主力だった。(吉田一雄氏 「大館野球史」)

趣味はゴルフと謡曲。前者はシングルの域、大館カントリークラブ初代理事長を務めた。後者は五木田武計について30年以上のキャリアがあり、ゆうに正教授格の実力と評価されている。

平成2年、秋田県文化功労章受章。平成12年2月7日死去。

(大館市の先人を顕彰する会 大館の人・事典)